湖北の木を語る

地名にふさわしい樹木を復活させたい、湖岸にふさわしい木を増やしたい―と、「湖岸に植栽文化を育てる会」を主宰、これまでに500本を越す樹木をびわ湖岸に植えてこられた川崎健史さん（80歳）を彦根市京町の自宅に訪ねた。

いま「私は木になりたい」という自分史を執筆中の川崎さんは、昭和52年に滋賀県立短大教授を退官以来、木を植えることを第二の人生の仕事とし、「自然保護でなく、小さな自然をつくることこそ大切。人は老後というけれど、私は第二の人生の方が現職ですわ」と意気軒昂。昭和58年の滋賀の自然保護賞の第１号受賞者でもある氏に、びわ湖岸の植生と、そこにふさわしい木は、と聞いてみた。

びわ湖岸の植生と、ふさわしい木は

ネム・センダン・タニウツギ

「湖畔に植栽文化を育てる会」主宰 川崎健史さんに聞く

樹木の名がつけられた地名は、昔その木がいっぱい群生していたことを物語っています。湖西の萩の浜にしろ、長浜のさいかち浜にしろ、よく見たら一本もなかった。これじゃいかん、地名にふさわしい樹木を復活させよう――と、昭和五十二年に県立短大を定年退官してから、湖岸にふさわしい木を植えることを私の第二の人生の仕事にしてきました。

植生とは自生なんです。風土に合っているかどうか、なんです。自然の中で異質でないか、調和しているかどうか、なんです。

自生している樹木は、一本だけでも絵になります。びわ湖の自然をきわだたせます。湖北のびわ湖は自然が残っているんだから、昔からあるものを尊重していけばいいんです。

異質のものだと自然をブチ壊すことになります。カイヅカイブキなどはよい例です。常緑樹で似合うものは少ないです。湖岸のケヤキ並木なども感心しません。異質とは、どこにでもある木と言えるかもしれません。

湖岸にふさわしい木は、苗木屋さんにないのが泣き所で、官公庁では業者の手持ちの多い木をすぐ使ってしまわれます。

だから私は、彦根市の荒神山の近くに畑を借り、実生から苗木を育てる苗圃を作りました。これまでに、サイカチ、センダン、ネム、マユミ、コムラサキ、サワグルミ、ヤマモモ、カミヤツデ（ツウタツボク）、シンジュ、ハマゴウ、カラスザンショウ、マサキ、トベラ、タニウツギ、ヤナギなどたくさんの苗木を育てました。マユミやコムラサキは挿し木で増やしました。

サイカチは八日市市のさいかち地蔵のところの木から実を取り苗木に育てました。タキイ種苗も協力してくれました。昔、この木はサヤが石けんの代用として売買されてきたのです。絹物はこれで洗うのが一番です。江州産は信州産などに比べて高値で取引されたようですよ。高さ一・五メートルくらいに育った四年生の苗三十六本を長浜のさいかち浜に植えました。

センダンは、昔は湖岸に多く自生していましたが、県道拡張などで伐採されてしまいました。初夏に紫色のかわいい花をつけ、道路に覆いかぶさるような風情がいいですね。皮は薬用になります。虫下しに使われてきましたし、実はアカギレによく効きました。枝ぶりがしなやかで、夏は日陰をつくり、枝が額縁の役割を果たして湖岸の風景を引き立ててくれます。この木に出会うとほっとしますね。学校の校庭にもよく似合います。

ネムも湖岸によく似合います。神戸市では街路樹に植えられています。近江八幡の岡山園地にネムの浜をつくろうと思って自然生えを移しましたが、失敗しました。二十本のうち五本だけしか残りませんでした。直根が長くて移植がむつかしいのです。実から育てなければなりません。夏、ピンクのビロードのような花がとても涼やかです。どんな荒れ地でも育ちます。景観木として湖北の風土によく似合います。

タブノキもいいですね。長浜では慶雲館に二、三本あるだけですが、湖北町にはいっぱいあります。平野部でタブの森がつくれたらいいですね。豊公園に植えてみましたがダメでした。砂地では無理だったんです。

サワグルミは公園の緑化にはもってこいです。高月町の日本電気硝子の工場に落ちていた実を、ぼくの圃場で二メートルくらいの苗木に育て、余呉湖畔に植えました。今では高さ七メートルくらいの大木に育っています。

マツやヤナギもいいですね。ただし、多すぎてはいやらしい。

ヤナギは、日本古来のタチヤナギと中国原産のシダレヤナギがありますが、どちらも湖岸の景観に風情を添えます。びわ町湖岸のヤナギは群生しすぎています。せっかくの美し

◀さいかち浜のサイカチ

大きな木陰をつくるセンダン▲

木と神とくらしのお話

わたしたちの祖先は、自然のなかにある山川草木すべてに霊魂が宿ると考えていた。そして、樹木は神さまが天から降りてくる神聖なものとして村々で祀られてきた。
湖北の集落には、そんな神の依代ともいえる巨樹が必ずある。樹種は、スギ、ケヤキ、カツラ、アカガシ、ヤナギとさまざまだが、ときには野神祭のときに豊作を祈る対象になったり、鎮守の森のご神木として崇められたり、病気を直す特別の薬効があると祀られたり……。

苔むした巨樹の下にたたずみ、そっと木の肌を撫でると、ホンワリとした暖かさが手の感触を通して伝わってくる。
耳を澄ますと、木の呼吸が聞こえてくる。
何百年と生きてきた木々は、わたしたちの何倍も生きてきて、わたしたちの生活を見守っていてくれるのだ。
時間に追われて日々を過ごすわたしたちは、そんな木の心と語り合う術を失ってしまった。

（高月町西物部のケヤキ）

でも、まだ湖北の村々には木の心がわかるお年寄りがいる。木と語り合って、ゆったりと流れる時を暮らすおじいさん、おばあさんの言葉に耳を傾けてみよう。きっとあなたにも、暖かい木の心が聞こえてくるはずだ。

余呉湖畔・羽衣伝説の柳

余呉湖のほとりに立つ柳の木の伝説を、川並の桐畑忠助さん（65歳）が話してくれました。
「天女の羽衣の話は、いろんなところで伝えられているけど、この余呉湖畔の衣掛柳にまつわる話は文献に残ってる一番古いもんらしいなぁ。
川並に住んでた「桐畑太夫」という若者が魚つりに出かけ、舟を柳の木につなごうと近づいていくと、きれいな薄ものの衣をその柳の枝にかけ、天女が水浴びをしているのを見かけた。桐畑太夫は羽衣を隠し、天に帰れんようにしてしもた。そして天女と結婚し、子どもも生まれ一緒に暮らしていたんやけど、ある日、子守唄のなかで「坊やの母の羽衣は千束千把の藁の下」と歌っているのを聞いて羽衣を探しあて天に帰ってしもうたんや。残された子どもは泣いて悲しんだけど、やがてりっぱに育ったその子が菅原道真やったそうや。
ここの近くの寺に羽衣の絵が彫ってある釣鐘があって、戦時中他の寺の鐘は国のために出されてしもたけど、この鐘だけは残そうとゆうて今でも大事に残ったるんやで。
あの衣掛柳もだいぶ古うなってきたし、いつ枯れてしまうかわからんで、この柳の苗を余呉湖の周りに三十本くらい挿し木したるんやわ。湖岸工事があっても、これだけは大事な後継ぎやさかいに……」（の）

余呉町上丹生のケヤキ

余呉町上丹生にある、樹齢八百年というケヤキは、高さが三五m、幹周りが九・一mもある大きな木です。隣にある幹周り四・五mという、これも大きな杉の木と上部で絡み合う様は、堂々として、見ていると圧倒されそうな気がします。まさに御神木とよぶのに相応しい姿です。
「このケヤキはずっと昔から〝野神さん〟と呼ばれてました。大きな木ですやろ。今でも村のもんは、手を合わせるんです。毎年八月二十三日には、五穀豊穣を祈って、悪魔払いのために木で作ったナギナタと、火付け札というお札を奉納しますんや。火付け札には、村を火災から守るという意味があるんですわ。この木のある場所が、ちょうど上丹生の鬼門にあたるんで、この木を祀り祈って、村を守るということなんでしょうなぁ」と話してくださったのは、上丹生にお住まいの山根耕太郎さん（71歳）です。
しかし、樹齢も八百年となると、大きな木の一部には、裂けたり枯れそうになったところもあるそうで、
「そういうところだけ切ろうかという話もあったんやけど、御神木やさかいにということで、そのままになってます。今では、木の両端からワイヤーで引っ張り合ってるんですよ」上丹生の人々の生活にどっしりと根をおろしている〝野神さん〟です。（南）